

2011.3.11

大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた

《いいつたえ、むかしばなし、はなし》—その8—

宮城県教育委員会の委託を受けて「宮城県民話伝承調査」をおこなったのは、1985年から1988年の3カ年でした。

その時に、聞き書きした宮城県各地の民話は2513話、民話を語ってくださった方は388人に及びました。

これらの記録は、『宮城県文化財調査報告書130集—宮城県の民話 民話伝承調査』（1988年3月刊）としてまとめ、宮城県教育委員会から出版されましたが、当時の区割りによる74市町村から、3話ないし5話を選んで活字化するという形でした。したがって、集めた民話の約1割に当たる274話のみの収録となりました。残りの2200話あまりの民話の記録と、語ってくださった話者の声は、わたしたちの手許に置かれたままでした。

これらの貴重な記録と語られた声は、わたしたちが採訪して聞き集めた他の民話とともに、目下、「民話 声の図書室」の大切な材料として、みなさんと共有すべく作業をすすめています。

いま、ここに紹介する民話は、かつて「民話伝承調査」をおこなった時に聞いたものであり、2011年3月11日、津波に襲われて、被災した集落で語られていた民話です。語った方の大部分は、震災の前にすでに亡くなっています。そして、語られた土地の姿はいま大きく変化し、若い人の多くは浜を去ることを余儀なくされるという現状もあります。

しかし、手許に残った語りは、かつてここで生きていた人々の姿を、ありありと伝えてくれます。それは、この土地特有の話もあれば、そうでないものもあります。日本民俗学が分類した口承文芸の分野に属する典型的な話型が、「実話」として語られていることも見逃せない大事な点です。それは、人々の暮らしがいつも「物語」とともにあったことを教えてくれます。

それらすべてを含めて、「この土地で語られていた民話」という括りでまとめてみました。

「2011・3・11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《いいつたえ、むかしばなし、はなし》」というテーマのもとに、シリーズで、みなさんに届けていく計画です。

一回目は本吉郡南三陸町戸倉で聞いた語りのなかから8話を紹介しました。二回目は石巻市雄勝町周辺で聞いた7話を紹介しました。三回目は気仙沼市本吉町小泉、津谷の民話を8話紹介しました。四回目は本吉郡南三陸町歌津周辺で聞いた民話を11話紹介し、五回目は七ヶ浜で聞いた7話、六回目は松島町で聞いた10話を紹介しました。七回目は牡鹿郡女川町で聞いた10話を紹介しました。今回は多賀城市で記録した10話です。

みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム

文 小野 和子

写真撮影 小田嶋 利江

映像 福原 悠介